

ひゃっぱ 百羽のツル

(作：花岡大学 絵：平成21年度大淀町桜ヶ丘識字学級生)

冷たい月の光で、こうこうと明るい、夜更けのひろい空でした。

そこへ、北の方から、真っ白な羽を、ヒワヒワとならしながら、百羽のツルが、飛んできました。



百羽のツルは、みんな、同じ速さで、白い羽を、ヒワヒワと、動かしていました。

首をのばして、ゆっくりゆっくりと、飛んでいるのは、疲れているからでした。

なにせ、北の果ての、さびしいこおりの国から、昼も夜も、休みなしに、飛び続けてきたのです。

だが、ここまで来れば、行き先は、もうすぐでした。

楽しんで、待ちに待っていた、きれいな湖のほとりへ、着くことができるのです。

「下をごらん、山脈だよ。」と、先頭の大きなツルが、嬉しそうに、言いました。

みんなは、いつと、下を見ました。黒々と、いちめんの大森林です。

雪をかむった、高い峯だけが、月の光をはねかえして、はがねのように、光っていました。

「もう、あとひといきだ。みんな、がんばれよ。」

百羽のツルは、目を、キロキロと光らせながら、疲れた羽に、力を込めて、しびれるほど冷たい、夜の空気をたたきました。

それで、飛び方は、今までよりも、少しだけ、速くなりました。

もう、あとが、しれているからです。

残りの力を、出しきって、ちょっとでも早く、湖へ着きたいのでした。

するとその時、一番後ろから飛んでいた、小さな子どものツルが、下へ下へと、おち始めました。



子どものツルは、みんなに、内緒にしていたが、病気だったのです。

ここまでついてくるのも、やっとでした。

みんなが、少しばかり速く飛び始めたので、子どものツルは、ついていこうとして、死にも狂いで、飛びました。それが、いけなかったのです。

あっという間に、羽が、動かなくなってしまう、吸い込まれるように、下へおち始めました。

だが、子どものツルは、みんなに、助けを求めようとは、思いませんでした。

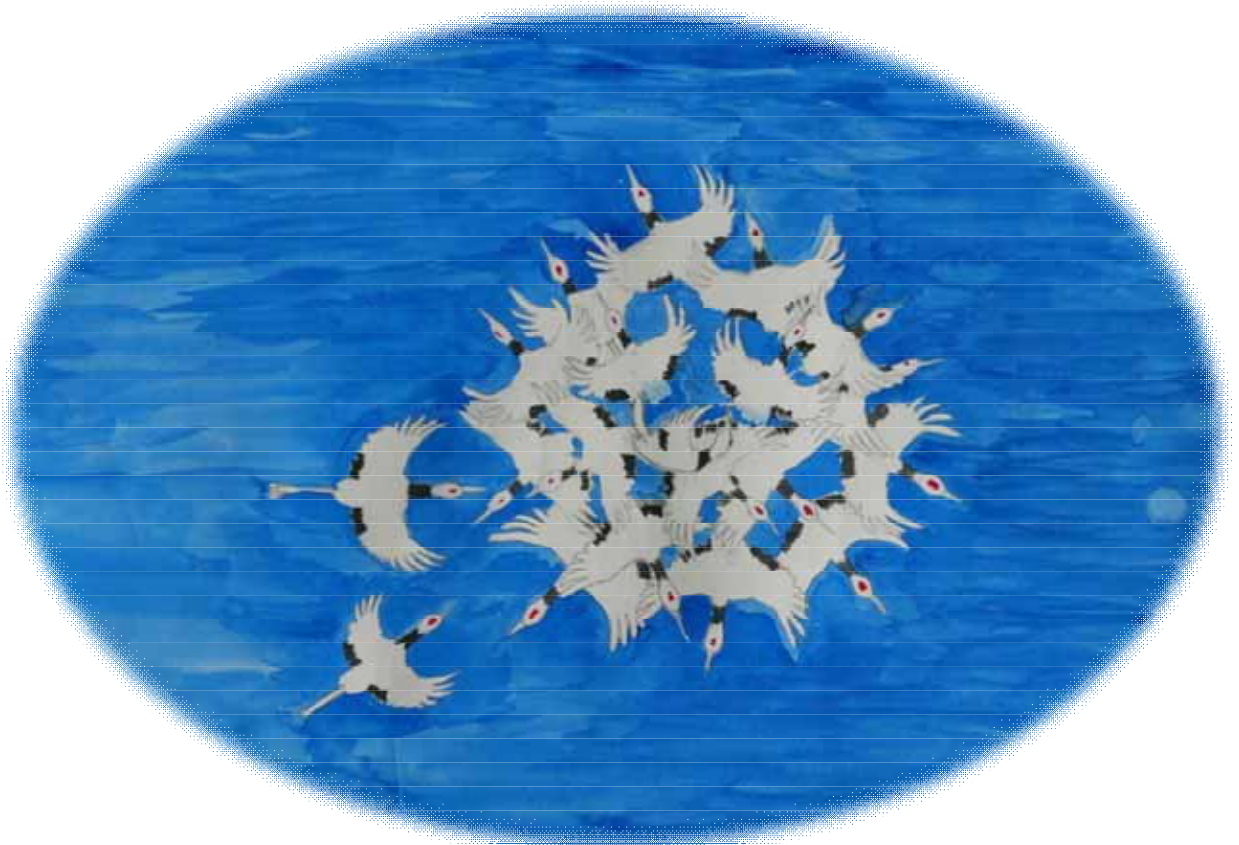
もうすぐだと、喜んでいる、みんなの喜びを、壊したくなかったからです。

黙って、グイグイとおちながら、小さなツルは、やがて、気を失ってしまいました。

子どものツルのおちるのをみつけて、そのすぐ前を飛んでいたツルが、鋭く鳴きました。

すると、たちまち、大変なことが起こりました。

前を飛んでいた、九十九羽のツルが、いっときに、さっと、下へ下へとおち始めたのです。



子どものツルよりも、もっと速く、月の光をつらぬいて飛ぶ、銀色の矢のように速く、おちました。

そして、おちていく子どものツルを、追い抜くと、黒々と続く、大森林のま上あたりで、九十九羽のツルは、さっと羽を組んで、一枚の白い網となったのです。

すばらしい九十九羽のツルの曲芸は、見事に、網の上に、子どものツルを受け止めると、そのまま空へ、舞い上がりました。



気を失った、子どものツルを、長い足でかかえた先頭のツルは、何事もなかったかのよう、みんなに、言いました。

「さあ、もとのように並んで、飛んでいこう。もうすぐだ。がんばれよ。」

こうこうと明るい、夜更けの空を百羽のツルは、真っ白な羽をそろえて、ヒワヒワと、空の彼方へ、次第に小さく消えていきました。